

直木博士の滿洲國入り

直木倫太郎博士は帝都大震災後の復興局長官を退いて以來、一民間會社大林組の技師長として直木博士らしい超然ぶりであつたが、昨年末突然、新興の滿洲國入りとなつて國道局長に就任された。

關西の生活氣分の良いところで悠々自適の晩年を送られる事とのみ思つてゐた直木博士が、骨を滿洲の野に埋むるの覺悟で任に就かれたのである。其意氣に對しても我等は敬虔の念に堪へないのであるが、新興國の最高技術官として官僚臭のない明朗な直木博士を得た事は無比の適任であると思ふ。我等一同は直木博士の健康を祈ると俱に友邦滿洲國の爲に滿腔の祝意を表するものである。

土木學會長久保田博士

久保田敬一博士は本年の土木學會總會に於て會長に推薦された。副會長には草間偉博士が推薦された。

從來の慣例を破つて會長としては最も若い人である。而して鐵道次官と云ふ要職にある人が會長になつた事も一の新例である。前會長眞田博士の時代には土木學會は内容の改革的事業を多分に實行した、又實行を今後に残してゐるものも多い、此際に久保田氏を會長に得た事は意義の深い事である。

金森博士の新工法

金森誠之博士は又も新工法を發表された。本號に紹介する鐵筋コンクリート基礎杭の新考案である。

日本の様な基礎工事費の多くを要する國では、尙ほ多大の新研究が其所から出て良いのである。何時もながら金森博士の不斷の研究と、實行力の旺盛なものには多大の敬意を表せざるを得ない。

三博士の逝去

新春早々我が土木界の著名な三博士が逝去された。男爵古市公威博士、日下部辨二郎博

士及び森垣龜一郎博士の三人である。

○

古市公威男の逝去は天壽を完ふされたものと申しても良い程に、明治、大正、昭和を通じて我學工學技術界の大先輩であつた。古市博士は土木工學の専門であつたが、日本の在ゆる工學の第一元老として、工學技術に關する公共の事業に對してはなすべき總ての事をなし終へた人である。現在の若い技術家は古市博士の功績を殆んど忘れてゐるのであるが現在の日本の技術界が世界の一流國に伍して遜色のないものとなつてゐるのは古市博士の永い間の公正なる指導があつたからである。

工學技術の進歩發展は何と云ふても實力第一の世界である。若も工學技術界に情實が跋扈したならば、其發達を沮害する事は甚しいものであらう。古市博士が晩年土木學會の最初の名譽會員に推薦せられた時、中山秀三郎博士は病體を提けて土木學會總會の壇上に立つて、熱誠の溢れる様な言辭で古市博士を推薦されたものである。古市博士の偉大なる處は、數々ある事であらうが、札幌農學校出の廣井博士を東京帝大の教授に拔擢された事などは其最も著しい事であると思ふ。

○

日下部辨二郎博士は内務省系統の先輩であるが、東京市の技師長として直木博士の前任者であつたと思ふ。表立つた公共の事業には餘り關與されなかつた様であるが、土木學會の會長にも推された程の先輩であるから、明治以來の我國の土木史上には重要な地位を占めた人である。

○

神戸市の土木部長で港灣部長を兼てゐる森垣龜一郎博士は、内務省神戸土木出張所長として永く大神戶港の改修工事に關與されてゐた港灣技術家として著名な人である。晩年は神戸市の各種土木事業の爲に一身を獻げてゐられたが遂に其公室に於て逝去された事は因縁の深い事である。